日本郭沫若研究会事務局
二〇一九年十二月二〇日発行

郭沫若研究会会報

第二十二号（総No.23）

目　次

1920年3月田漢の博多訪問をめぐって
—併せて郭沫若の「梅花樹下酔歌」の制作期日について／岩佐昌暲／1

紹介　老舎・胡絜青著『京腔北韻』のこと／杉本達夫／9、

『沫若自伝』を読む㈤
苹果ニシテ花紅ノ味ガスル「リンゴ」
—極めて私的な『自伝』の楽しみ方／上野惠司／12

成仿吾の欧州行（四）　成仿吾が日本に来た時期／成家徹郎／16

執筆者・翻訳者紹介／15

編集後記／21

投稿規定／22

１９２０年3月田漢の博多訪問をめぐって

―併せて郭沫若の「梅花樹下酔歌」の制作期日について

岩佐昌暲

1．はじめに――郭沫若と田漢

白話詩の黎明期だった五四時期に、白話詩人としての郭沫若の詩才を認め、彼を中国詩壇に推し出したのは、上海の有力紙『時事新報』副刊「学灯」編集者だった宗白華である。

郭沫若によれば、宗白華は、初めは白話の新詩を余り好まなかったようで、彼が編集者になると「学灯」に新詩が載らなくなった①。だが、郭が彼に送った墨子についての論文を読んで以後、郭を高く評価するようになり、ついには凡そ郭沫若の寄稿した作品は、没にすることなくすべて採用し「学灯」に掲載し出した。それがきっかけで、郭沫若は次々に詩を書いて上海に送った。後に、「まるで作詩工場」と化したようになったと言い、当時の自分についてこう書いている。

「１９１９年から１９２０年にかけての数か月間、ほとんど毎日詩の陶酔境」にいて、「詩的発作が襲ってくると、まるで熱病のように寒気がし、筆をとった手がふるえて、字にならないこともあ」るほどだった。「しかし１９２０年の4、5月ごろ白華がドイツへ行ってしまい、「学灯」の編集者が交代すると、私の詩の泉も枯れてしまった」（郭沫若『創造十年』訳文は東洋文庫版による）

この宗白華が郭沫若に紹介したのが、同時期に東京高等師範に留学中だった田漢である。

宗白華は、１９２０年1月3日付の郭沫若に宛てた手紙の中で次のように書いた。

「ぼくには田漢という友達がいます。欧米文学に大変造詣が深く、いま東京に留学中です。彼は君と同調できるはずです。君たち二人が手を携え、東方の未来の詩人になることを願っています。君がもし時間をつくって彼に会いたいと思うなら、紹介します（この手紙を持っていけば良いです。僕たちの交流は、もっぱら精神を重んじ、形式は不要です）。」（『三葉集』②）

宗白華は、これと同時に田漢にも手紙を書いている。

「ぼくはまたも君と同類の友を得た。東方未来の詩人・郭沫若だ。／ぼくはもう彼に手紙を書いて、君に連絡し、詩友になるように伝えた。連絡はあったかい？彼の近作の長編詩と、彼がぼくにくれた詩についての長い手紙を同封し、君に読んでほしい。彼の人となりと詩の才能が分かるだろう（もう一通彼に宛てた返信があるので、これも君に読んでほしい）。」（『三葉集』）

これをきっかけに、郭沫若と田漢の手紙のやり取りが始まる。その間、郭沫若は田漢に自分の友人・成仿吾を紹介し、田漢は郭沫若に鄭伯奇を紹介するなど、21年に結成される創造社の骨格も徐々に形作られていくが、今は触れない。

郭沫若と田漢は手紙のやり取りを通じて急速に親密の度を強め、ついに田漢は博多に行って郭沫若と直接会いたいという気持ちを生じことになる。

１９２０年3月19日午前、田漢が突然訪ねて来る。前触れもなく現れた遠来の客に郭沫若は驚くが、田漢は事前に電報を打って来訪の予定を知らせていた。だが、電報は届いておらず、一階で一家の昼食の支度をしていた郭沫若を慌てさせた。というのもこれに先立つ四日前の3月15日、妻のアンナ（佐藤富子）が、二人目の子・博生を出産したばかりだったからである。

初対面の二人はすぐに打ち解け、田漢は郭沫若一家の狭いあばら家（郭一家は大学近くの質屋の倉庫の二階を借りて住んでいた）に五

日間（正確には四日間）も泊まり込むことになる。そして、田漢来博の顛末と滞在中の行程は、郭沫若によって詳しく宗白華に伝えられた。その手紙（日付は「民国9年3月3日」となっているが、記述内容から3月30日の誤りであることは明確）は、3月19日の田漢来訪の当日の出来事から始まり、3月24日田漢を博多駅に見送るまでの出来事を綴り、次の文で終わっている。

「寿昌が帰ってもう六日になります。ぼくも今もう春休み中です。君は、ぼくたちのつまらない会話を書いて寄こせと言いましたが、いったん書き出したらこんな長編になってしまい、君に読む精力を無駄に使わせることになりました。お許しください。鶏が恐らくまた時を告げることでしょう。眠らなければなりません。ではまた。／沫若　九、三、三」

そしてこれが、同年五月上海の亜東図書館（「図書館」は出版社）から出版された宗白華・田漢・郭沫若の往復書簡集『三葉集』の掉尾を飾る手紙となるのである。

中国で刊行された『郭沫若年譜』は、簡便なものも含めれば十種を下らないと思うが、最も新しく、最も権威ありと考えられるのは、（**A**）林甘泉、蔡震主編『郭沫若年譜長編（1892～1978年）』全四巻、中国社会科学出版社、2017年10月刊、であろう。この**A**が刊行されるまでは、（**B**）龔継民・方仁念編『郭沫若年譜』（上中下）、天津人民出版社、1992年10月刊が行われていた。そのさらに前には、王継権・童煒鋼編『郭沫若年譜』（上下）、江蘇人民出版社、1983年4月刊があったというが、私は持たない。

AもBも、もちろん田漢の博多来訪を記しており、その滞在期間はともに「1920年3月19日から24日まで」としている。その根拠資料となったのが『三葉集』所収の郭沫若のこの手紙であった。いま、郭沫若の手紙に基づいて田漢博多滞在中の二人の行動を整理してみると、おおよそ以下のようである。

3月19日　アンナは産後わずか三日で床に伏せっており、郭沫若が昼食の支度をしていたところに、田漢が訪ねてきた。昼食後、息子の和夫と一緒に田漢を連れて　箱崎海岸を散歩する。そのとき、彼は田漢に博多湾に襲来した元軍が一夜のうちに全滅した話をして聞かせる。その話しは郭沫若が博多に来たばかりの時に、この海岸で聞いたものだった。一人の教員（原文「教習」）が小学生の集団に対し身振り手振りでその話をしていたのだという。そばで聞いていた郭沫若は「限りない敵愾心」を呼び起された。こういう思い出話をしながら、二人は医学部（原文は「医科大学」）を通り抜けて東公園に行く。この日の上海『時事新報・学灯』には「光海」が掲載されたが郭はもちろんまだ知らない。

3月20日（晴れ）　田漢はかなり遅くまで寝ていた。朝食後、郭はお湯を沸かし赤ん坊を風呂に入れたりしている。田漢は二階で手紙の整理（これは郭・田・宗の手紙をまとめ『三葉集』として出版するための作業である）をし、また数日前に届いた『少年中国』（第8期・詩学号、2月15日発行）を繰り返し読んでいた。彼の「詩人与労働問題」が掲載されていたからである。午後は二人でファウスト第一部を読む。彼らが議論した個所は郭沫若がすでに翻訳をすませ、『学灯』に送ったところである。その訳文は丁度この日発行の『学灯』に掲載されていたが、もちろん二人はまだ知らない。なお、『少年中国』（第9期・3月15日発行）には shokana 著・田漢訳「歌徳詩中所表現的思想」と郭沫若の「『歌徳詩中所表現的思想』附白」が掲載され、田漢の訳文の ゲーテ詩は、すべて郭沫若の訳だった。夜、松原を散歩。郭沫若が「結婚後も恋愛を保持できるか」と言いだし、それについて議論。最後に松井須磨子の自殺などが話題になった。

3月21日（晴れ）天気はよかったが、郭沫若が具合が悪く、午前中は家でハイネの詩を読む。郭沫若は二年前に彼の詩を訳して

いた。田漢は、いっしょにハイネを中国に紹介しようと持ちかけるが、郭沫若は断った。「淫猥を教える作品」だと誤解する者が出るのを恐れるからだ、という理由だった。午後、海岸の砂浜に座って話す。田漢は女性の三人称を表す漢字「她」は不平等だと主張。男性の三人称を表す漢字（他）は人偏（にんべん）＋「也」なのに、女の場合はなぜ女偏＋「也」なのか、女は「人」ではないのかという理屈である。これは、当時の中国の「女権主義者」たちが言っていたのと同じ主張。田漢は「彼」を表すのに「力」＋「也」にすればいいという。「男」から「田」を省くわけである。その後、近くの銭湯で入浴して、帰宅。帰り道で三つ葉の群生地を通りかかる。

3月22日（雨）　田漢、往復書簡集の原稿（手紙）の整理を終え、名前をつけてくれと郭沫若に頼む。郭沫若はゆうべの三つ葉を思い出す。田漢はテーブルの上に置いてあったドイツ語版『若きウエルテルの悩み』を見て、直ちに序文を書く。

3月23日　田漢と汽車で大宰府に行く。途中、雑餉隈（ざっしょのくま）で窓から切符を落とし、探しに車を降り、発車した列車に乗れないまま駅に取り残されてしまう。そのまま徒歩で二日市に向かい、田漢と出会って太宰府参拝を果たす。田漢は宗白華に「昨日郭沫若と太宰府に行きました。梅の花を見、写真を撮り、歌を歌いました。二日市から歩いて行き、歩いて帰ったのですが、いやもう面白かった」と書き送っている。太宰府天満宮では彼ら茶店でお茶を飲んだ後、宮の背後の小山に登り、昼寝をし、山腹の茶店で酒を飲んだりしている。その勢いで詠んだのが今回の手紙に書きとめられた詩（発表時の題名は「梅花樹下酔歌―偕田寿昌兄再游太宰府」）である。この詩はこの年8月刊行の『女神』に収められているが、『女神』収録時には「写真師！写真師！」以下の十行は削除されている。この後、山を下りた二人は、最初の茶店に立ち寄り、店の主人に写真屋を探してもらい、写真を撮ってもらう。帰途についたときは、もう黄昏時だった。

3月24日　朝、田漢が午後には東京に帰らなければと言い出す。朝食後、博多湾を望む高台にある西公園に行き、博多湾、海の中道、志賀島などを眺めたのち、丁度開催中（3月20日に開幕したばかりだった）の福岡工業博覧会を見に行く。西公園の下が第二会場であり、そこには台湾館、朝鮮館、満蒙館などがあった。台湾館は半分が茶店で台湾から連れてこられた十三、四歳の少女たちが給仕として働いており、二人の憤激をよび起こす。会場を出た二人は須崎裏のメイン会場も参観。空はすでに暗くなっていた。田漢は博多駅夜8時20分発の汽車で東京に帰って行った。

2．問題の所在

前述したように、郭沫若年譜における、田漢の博多での行動は、以上に見た郭沫若の手紙の記述をもとに書かれている。従って、田漢博多滞在中の行動の時間（日付）は、**A**B同じでなければならない。

ところが、この日付に関して**A**と**B**とで一か所だけ郭沫若の手紙と異なる点がある。

それは田の滞在中二人が太宰府に遊んだ日の日付である。

郭沫若は明記していないが、それが3月23日と読める書き方をしている（後述）。**A**はそれを受けて3月23日の項に「田寿昌とともに太宰府に遊ぶ。（1920年3月30日致宗白華信。《三葉集》）」と記している。ところが**B**は3月22日の項に「田寿昌と梅花の名勝地太宰府に游ぶ」と記すのである。なぜであろうか。

実は、田漢滞在中の記録を宗白華に知らせたのは、郭沫若だけではなかった。田漢自身もまた福岡から宗白華に二度手紙を出していたのである。

一通目は「白華兄／ぼくはいま沫若の家の二階にいる。／二階には二部屋あって、ぼくは前の部屋に座っている。窓を開けると、

すぐそこに博多湾が見える。（以下略）」とあり、いわば到着の知らせである。日付はない。

二通目は、これが問題で、3月23日付。こう書かれている。

「白華／きのう沫若と太宰府に行った（傍線筆者）。梅の花を見て、写真を撮り、歌を歌った。二日市から歩いて行き、歩いて帰ったが、いやもう面白かった。写真が届いたら、君にも一枚差し上げる。／今日の午後4時19分の汽車で東京に帰るつもりだ。東京ではやらなければいけないことが沢山ある。また鄭伯奇兄の東京行きの手配もある。ぼくは彼を迎えなければいけないんだ。君はいまどんなものを書いている？『時事新報』をぼくらの通信社のために一部予約してもらえないだろうか？先日送ったKleeblatth（『三葉集』の原稿を指す）はもう二通欠けていたので一緒に送る。／田漢　九、三、二十三」

Bの編者たちが、二人が太宰府に行った日付について、郭沫若の手紙を採らず、田漢の宗白華宛手紙の記述を信用したのは明らかである。だが、なぜ田漢の記述を真としたのか、その根拠は明らかにされていない。

果たして二人が太宰府に行ったのは22日（田漢の手紙）か、23日（郭沫若の手紙）か？この、或る意味ではどうでもいい些事を解決したいというのが、本稿の目的である、

実は、この問題を調べていくうちに、事柄が二人が太宰府に言ったのは22日か、23日か、というだけではなく、田漢が東京に帰ったのは、24日ではなく、23日だったのではないか、ということにまで及ぶことが明らかになった。そして、更にこのこの日付問題が決着すれば、従来不明のままになっている郭沫若の詩作品「梅花樹下酔歌」の制作日時の問題も解決する。この詩は二人で太宰府に行った際に、郭沫若が興に任せて詠んだもので、その日付が確定しないために、制作日時が不明なままなのである③。**B**は当然これを3月22日の作としている。また中国社会科学院文学研究所総纂「中国文学史資料全編」現代巻　36『郭沫若研究　資料（下）』所収「郭沫若著訳繫年」知識産権出版社、２０１０年3月、もこの見解を踏襲し、それが文学史の事実になっているようにもみえる。しかし**A**はこの問題に言及していない。また、上海図書館編注『著訳系年目録　解放前部分』では、「3月22日作」としつつ、同時に田漢と郭沫若の宗白華宛の手紙を引いて「当事者二人の記述が違うので、この詩は3月22日に書かれたとも、3月23日に書かれたとも言える」と断定を避けた書き方をしている。

では、二人の太宰府行きは一体いつだったのか。それをはっきりさせることが、これらの問題の解決につながるならば、瑣事としても意味のない作業でもあるまい。小論はそのような観点からする、この問題についての私見である。

2．方法

この問題を考える上で、筆者は、3月19日～24日までの福岡地方の気象観測データ④を基に、郭沫若の手紙の内容を検討するという方法を取りたい。観測データは客観的な記録であり、主観や記憶による記述のあいまいさを修正する根拠になると考えるからである。

福岡県で気象に関する記録が取られ始めるのは、明治23（１８９０）年からである。この年1月福岡県立二等測候所が設置され、気象業務が始まった。同測候所は明治29（１８９６）年一等測候所に昇格し、明治40（１９０７）福岡県住吉村春吉（現在の福岡市中央区春吉。ほぼ福岡市の中心地区）に庁舎を新築移転し、以後昭和13（１９３８）年国営中央気象台福岡支台（福岡市郊外）設置まで、ここで気象業務を展開した⑤。

郭沫若の福岡在住期の気象データは、この住吉村春吉で観測されたものである。春吉から郭沫若の居住地・箱崎宮近くまでは、直線距離でほぼ四キロ余、基本的にこの観測データの範囲内の気

象現象だったとみていい。ただ、海岸に近い分だけ気温等はやや低かったであろう。

3．根拠とするデータ

さて、1920年3月19日〜3月24日に至る福岡市の気象観測データは右図の通りである。

日時	天気	気温			雨量
		最高	最低	平均	
19	晴	17.4	1.4	8.9	-
20	曇	21.8	5.0	13.8	-
21	小雨	14.7	10.7	12.8	4.0
22	晴	20.9	8.2	13.9	-
23	曇	12.8	9.7	10.9	0.6
24	雨	9.8	7.6	8.9	7.6

4．郭書簡に見える気象記事と観測データとの齟齬

一方、郭沫若の手紙で、天気について書いているのは21日、22日、23日である。以下、その個所を抜き書きしておく。

（1）3月21日「21日。晴 ―連日好天続きで、正に行楽日和でしたが、ぼくは病気でどこにも出かけられませんでした。」

（2）3月22日「22日。雨。寿昌は（書簡集のための）手紙の整理を終え、ぼくに本の名前を考えろと言います。ぼくは昨日の三つ葉を連想しました。」

（3）3月23日「ぼくたちは今汽車の中です！これから太宰府に行こうとしてます。（中略）今日は天気がすごくいいです。」

これらの記述を実際の観測データと比較してみると、幾らかの齟齬のあることに気づく。郭沫若が「天晴―連日来天気都好,正好畅游」と書いている21日は、観測データでは小雨で雨量は4ミリである。4ミリの雨とはどの程度の雨か。参考までに、ネットによれば2ミリの雨について「もうこれはハッキリとした雨。ほぼ百パーセントの人が傘をさす雨です。例えば徒歩3分のコンビニに買い物に行く程度でも傘をさす雨です」とあり、5ミリの雨は「傘を持っていても、出歩くのはためらわれます。強いあめです。われわれ生活者の立場から言えば、5ミリは明らかに強い雨なのです。ビニール傘ではやや頼りないくらいの雨です」とある⑥。このような雨の降った日を「天晴,正好畅游」書くだろうか？

郭沫若の手紙では、22日を「雨」と書いているが、観測データでは晴れである。日中の最高気温20・8。これは田漢の博多滞在期間中では20日に次いで高く、平均気温13・9度は最も高い。雨は1ミリも記録されていない。

次に23日、郭沫若が太宰府に行ったと書いている日である。「今日天気甚好」と書かれる。雨だった昨日と打って変わって、という気分が込められていると筆者は読んだ。彼らは汽車でまず二日市まで行き、そこから太宰府に向かうのだが、その途中雑餉隈駅で切符を窓から落とし、下車して探しているうちに汽車は出発してしまう。駅に引き返した時、壁にかかった時計は11時を打ったところで、駅員に尋ねると次の列車は1時半ごろまでないという、と郭沫若は書いている。これらの記述を、当時の鹿児島本線時刻表（1920年3月1日改正）⑦と対照してみると、吉塚駅を10時41分に出発し、雑餉隈駅を11時04分に発車する列車を見出す。これから判断すると、郭沫若は10時41分に吉塚を発ち、11時18分

に二日市を出る列車に乗り、途中雑餉隈駅を下りて切符を探し、乗り遅れて、そのまま二日市まで歩いて行ったと想像できる。

その時のことを「ぼくは歩きながらゲーテの「風光明媚な場所」（『ファウスト』第2部第一幕冒頭の題名。高橋義孝訳（新潮文庫）では「優雅な土地」と訳されている）を口ずさんでいました。……まるで本当に光の海に浮かんで漂っているようでした。〟徒歩で、心も軽く、この広々とした道を歩（下略。郭沫若はホイットマン『広々とした道を歩く』の詩句を引用している）んでいるような気持ちを、大いに感じました」などと書いている。二日市に着いた郭沫若は彼を待っていた田漢と再会、またも徒歩で太宰府に向かう。以下はそのときの様子である。「ぼくたちが二日市から太宰府まで歩いて行く途中、明るい燦爛とかがやく自然が、ぼくたちに無限の詩の材料を提供してくれました。（中略）道に沿って歩き、澄み渡った空から時に透き通った鳥の鳴き声が聞こえます。声は聞こえるのに姿は見えないのです。」二人が天気晴朗、澄明な大気の中を愉快に歩いて行く様子が髣髴する。太宰府に着いた後、山に登り、下山途中「松林の草むらの上で休息しました。（中略）二人とも疲れて、体を横にして眠り、ぼくは夢まで見てしまいました。」と書いている。

これを気候について言えば、この日は、天気は極めてよく、大地も横になって休み、寝入ってしまうほど、適度に乾燥し、気温も低くなかったことが推測される。それでは観測データからみた23日の気候はどうだっただろうか。天気は曇り、最高気温は12・8度、平均気温は10.9度である。またこの日、福岡では0.6ミリと微量ながら降雨も観測されている。郭沫若の書いている天気や自然描写、そのときの彼らのうきうきした気分の描写とはいささか不釣り合いのように思われるのである。さらに言うならば、これは22日の気候にふさわしく、この点からみれば、太宰府行は田漢の手紙の言う22日説がより適切だと考えられる。

24日は、田漢の博多滞在最終日である。郭沫若はこう書いている。「今朝(二十四日)寿昌兄が起きて、午後には東京に戻りたいと言いいます。朝ご飯の後、急いで彼を連れて市の南にある西公園に遊びに行きました。公園は少し小高い位置にあり、博多湾を俯瞰することができます。この日は少し風があり、湾は波浪が逆巻いていました。カモメも舞い上がったり、下がったりしていました。」この後、二人は折から開催中（3月20日に開幕したばかり）だった工業博覧会を見に行く。西公園の下が第二会場、第一会場は、福岡市の中心近くの須崎町に設けられていた。その参観を終えた頃「時間はもう遅くなっていた」。田漢はこの夜、8時20分の夜行列車で帰京するのである。

郭沫若の記述を読む限り、24日の天気は別に悪いと言うほどではなさそうに思える。だが、観測データによれば、この日は最高気温9.8度、最低気温7.6度、平均気温が8.9度と3月初旬なみの寒い天気であり、その上21日よりずっと強い7.6ミリの本格的な降雨があった。移動には傘など雨具も必要だったはずで、夕方まで戸外を歩き回るには決して最適な気象条件ではなかった。むしろ、こういう天候のもとで、一日中展覧会を見て回ったのだろうか、と疑問をもつような悪天候である。

気象の観点からこの24日の記述を読むと、ある違和感がある。それは、田漢滞在中の行動を宗白華に報告するこの手紙に、基本的に気象についての記事を欠かさなかった郭沫若が、なぜ、この日の悪天候について記さなかったかということである。西公園から見る博多湾の波浪について書きながら、降雨について記さず、雨の中広い博覧会場を移動するときの寒さや、不便ついて何も書いていない。それは、実はこの日が本格的な雨が降り、寒気の強かった24日ではなく、お湿り程度の雨が記録されているとは言え、概して穏やかな天候の23日だったからではないだろうか？

5．気象データ以外の郭書簡の問題点

以上は気象についての問題点だが、次にそれ以外の問題点を検討したい。

まず検討したいのは、この長文の手紙の書き方についてである。郭の手紙は3月30日の日付になっており、田漢來博から帰京までの日々の出来事を日を追って書き記すという構成になっている。

ここで注意したいのは、22日である。すでに見たように郭沫若は22日を「雨。寿昌把信稿整理好了,叫我想个名字,我连想到昨天的三叶草上来。」と始めている。『三葉集』出版のため原稿を整理し終えた田漢が、机の上に置かれた『若きウェルテルの悩み』を見て、『三葉集』を『若きウェルテルの悩み』に擬えるような序文を書いたこと、それを「僭越」と感じたことなどが書かれている。もちろんこの日に太宰府に行った可能性がないわけではない。しかし、これもわざわざ雨の日に行くというのも不自然である。そしてその日の二人の行動についてこれ以外に具体的なことは何一つ書いていない。そしてこの日の文を「ここまで書いたときに、ニワトリが鳴きました。明日また続きを書きます。」で終え、20日夜の田漢との会話を補足した後、一転して、すでに紹介したような太宰府行の様子を書き始める。少し引用しよう。

「ぼくたちは今ちょうど汽車の中です！太宰府に行く途中なのです。大宰府はここからはまだ遠くて、博多駅から汽車で、二日市まで十マイル（一マイル＝約一・六キロ）、二日市から太宰府までなお二マイルぐらいあります。今日はとてもいい天気です。汽車は青々とした田畑の中を疾走しています。」

郭沫若の手紙の書き方から言って、これはやや唐突である。それまでは、まず日付、ついでその日の天候、それからその日の行動、出来事などを書くという順序である。今引いた23日の太宰府行きの手紙には、それが何日の出来事なのかという日付が書かれておらず、いきなり「ぼくたちは今汽車の中です！」で始まる点、また、内容も立体派の詩人マックス・ウェーバーの詩「瞬間」の英文とその中国語訳や、「帰宅後にすぐ読んだ」というシェリーの詩（「ひばりに寄せて」）の全訳がふくまれるなど、単なる田漢滞在中の旅游報告とは違う、それに事寄せた文芸エッセイの体裁に似たものとなっている。

丁寧に読んでみると、書き方の変化は22日以後の記述から始まるように思える。それまでの書きぶりは、毎日少しずつ日々の出来事を思い出し、その日のうちにそれを記録していっている、というふうで、22日の記録は「ここまで書いたときに鶏が鳴きました。明日また続きを書きます」としている。だが、それ以後は文芸エッセイ的色彩を強めていくのである。

そういうことから、この手紙は初めの三日間を除いて、あるいはそのすべてさえ、実は、田漢帰京後、3月30日に近い数日間に一挙に書かれたのではないか、と私は思う。

田漢帰京後、彼は宗白華に知らせるべく、19日以降の田漢滞在中の出来事を回想しつつ、記録を始めたのだが、21日と22日を混同し、しかも、たぶんそのために、22日に一体何をしたのか思い出せなくなり、そのまま筆を置いて、今度は太宰府行の記憶を再現し、具体的な事実だけではなく、それにつきまとう意識の流れまで記述しはじめたのではないだろうか。その過程で郭沫若は事実の正確な記述者たることをやめて、田漢福岡滞在時の出来事の文学的な再現に力を注ぎ始めたのではないだろうか。21日以後の出来事は、彼にとって出来事とそれから触発される意識が重要であって、それを時間と結びつけることは二次的な問題になっていたように思う。

そして、もしそうならば、彼の手紙から彼らの行動の日付を探し出そうとすることは止め、もっと別の動かしがたい客観的な事象（例えば、小論が試みているような「気象データ」）に基づく追求の方が、より生産的であるように感じられる。

6. 暫定的な結論

以上、気象および手紙の書き方の特異性という観点から、田漢が博多を訪問した3月19日から24日までの、郭の手紙の問題点を検討してきた。そして、気象記述という点だけに絞れば、郭書簡には以下の(1)(2)のような疑問点(明白な誤りも含む)のあることが明らかになった。(3)(4)(5)はそれらを私なりに解釈して得た暫定的な結論である。不備な点のあることは承知しているが、とりあえず提出し、会員諸賢のご批判を仰ぎたいと思う。

(1) 実際の気象観測データとの不一致

3月21日は雨であるにもかかわらず、書簡では「天晴」としている。逆に22日は晴れで好天にも関わらず、「雨」としている。23日は「曇」で気温も寒く、僅かながら「雨」もあったが、郭沫若はこの日に太宰府に行き、しかも素晴らしい好天だったように書いている。24日は雨模様の悪天候だったが、手紙にはそのことは触れられていない。

(2) 22日の行動記録の欠如

22日、田漢が『三葉集』の手紙の整理をしたという以外に、当日の具体的な記録が欠けている。

(3) これは、前日21日の雨の日の出来事の一部を、この日(22日)が雨だと思ったため、取り違えているのであって、実際にはこの日に太宰府に行ったのである。気象データはそのことを示している。

(4)「梅花樹下酔歌」の創作日時は3月22日である。

(5) 田漢が帰京したのは、従来考えられている24日ではなく、23日である。二人が太宰府に行ったのは22日である。

郭沫若は22日が雨だったと記憶違いをしたため、太宰府行を23日に当てはめざるを得なかった。だが、太宰府行は田漢の書簡通り、22日である。とすると、24日の出来事とされている西公園、工業展覧会参観と田漢の帰京は23日だったと考えるほかない。24日は悪天候で、遊覧等には適さない、さらにそのことが全く記されていないのも、帰京が24日ではなかったことの傍証になる。

(6) こうした誤りの原因はすべて郭沫若の記憶違い(特に、21日と22日の混同)にある。

注

① 郭沫若「我的詩作的経過」『郭沫若全集』第16巻所収。邦訳に顧雯・岩佐昌暲「私の詩作の経緯」東海大学総合経営学部紀要第4号、2011年3月、がある。

② 「郭沫若致宗白華」『三葉集』『郭沫若全集』文学編第15巻。これ以後の郭沫若の手紙からの引用文はすべて全集本に基づく。

③ この問題に関しては陳承志「一日之辨—《梅花樹下酔歌》写于哪一天」(陳永志『《女神》校釈』華東師範大学出版社、2008年9月、に詳しい考察がある。陳論文は郭沫若の手紙の書き方に注目し、「22～24日の三日間の会話や行動は、郭沫若がその日に書き、30日の深夜t宗白華に手紙を書いたときに整理してまとめた」と推察している。小論もそれから示唆を受けているが、方法も、結論(陳氏は23日説)も異なる。筆者もかつて小論と異なる視角と方法で制作日時を考察し、陳氏と同じ結論に至った(顧雯・岩佐昌暲「『三葉集』その4—2「郭沫若より宗白華への手紙」(翻訳・訳注と解説)」東海大学経営学部紀要第2号、2015年3月、の解説)が、これを撤回し、本論を以って結論としたい。

④ 福岡管区気象台編『福岡の気象百年』(財)日本気象協会福岡本部、1990年1月、「気温、雨量データ」は、福岡管区気象台編『福岡県の気象』西日本気象協会、1960年10月、による。

⑤ 「福岡管区気象台の沿革」。注6「福岡の気象百年」所収。

⑥ http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question-dail/q12127832

⑦ 公認汽車汽船旅行案内』第323号、旅行案内社、1921年8月。

付記

小論は2016年8月法政大学で開催された「第5回国際郭沫若学会学術討論会」での口頭発表(「関於1920年3月田漢訪問博多的時間問題」、趙笑潔・蔡震主編『郭沫若研究』総13輯、社会科学文献出版社、2017年3月、に掲載)を基にした日本語版である。

紹介　老舎・胡絜青著『京腔北韻』のこと

杉　本　達　夫

老舎・胡絜青著『京腔北韻』という本が出た（商務印書館。2018年9月）。題名から推して、夫妻が北京語についてあれこれ語っているのかと思った。全集に含まれない老舎の文章が、いくつか新たに見つかったのかと期待した。だがそうではなかった。夫妻の散文を別々に集めただけで、つまりはふたつの散文集が合体してあるだけで、北京語自体を語るものではなかった。北京人の醸し出す雰囲気を味わう趣旨の題名、と解すればよかろうか。老舎の散文は単行本がいくつもあるし、全集に収められてもいることだから、ここは胡絜青に注目しよう。このようにまとめられたものを読むのは、わたしは初めてだからである。

本書の胡絜青の部には、老舎との結婚のいきさつを述べた「結婚」（1995年4月口述）に始まって、合計十三篇の文章が収録されている。「从北平到重庆」が1944年3月の発表であるのを除けば、残りはすべて文革後の文章である。そのうち直接老舎や老舎作品を語る三篇のほかは、すべて故人となった人々への記念ないし追悼であるが、そうした他人を語る文の中にも、たえず老舎が重要な位置を占める。人縁は多くの場合、老舎を軸にしてひろがるのであり、老舎の悲劇的な最期が、夫人をとらえて離さないのである。画家たるおのれ、おのれの画業については語ることまことに少ない。

わたしは生前の胡絜青夫人から、さまざまにご厚誼をいただいている。いま夫人の面影を偲びつつ、いくつかの文章を紹介し、かつ、勝手な感想を述べてみたい。

まずは「老舎和赵树理」から。趙樹里は根拠地から生まれた作家であり、人民文学の旗手であって、建国後は北京に暮らす時間が多かった。山西の農村に根を下ろした趙樹里と、北京と一体化した老舎とは、事ごとに対極にあるかに見えながら、多くの共通点を持ち、大衆文学の分野をはじめ、手を携えて働く場面が多かった。老舎家の老舎の仕事部屋で、協議し懇談し食事をすることもあった。そんな折に、趙樹里は夫人の目にどう映っていたのだろうか。趙樹里は北京に来ても、山西での生活スタイルを保ち続けていた。宿舎の部屋はがらんどうで、なんの家具も入れなかった。硬い板の寝台に寝ていた。ある時は老舎の狭い仕事部屋で、大声あげて村の歌を歌った。……。胡絜青の描く趙樹里の姿を、わたしはことさら面白く思った。だがそういう筋金入りの田舎スタイルに、ひそかに眉をひそめる都会人作家もいたにちがいない。なお、文革期に大寨村の指導者から中央に呼ばれ、副総理にまで引き上げられた陳永貴は、農村での服装を改めず、国を代表して海外に出た際にも、頭に手拭をかぶっていた。農民のプライドなのだろうか。ひょっとして、自分をもてはやす政治への抗議の意味を込めていたのだろうか。

趙樹里はすでに文芸界の幹部であり、多くの時間を北京で過ごさざるを得ない。大都市の環境に慣れることによって、おのれの変質を来たし、創作の原点を見失うことを、かれは厳しく警戒していたにちがいない。確たる原点を持つ者同士、文を追求してやまず、厳しくおのれを律する者同士、豊かにユーモア感覚をもつ者同士、老舎と趙樹里は互いを深く理解していたと思われる。趙樹里が短編「套不住的手」を発表したとき、老舎は珍しく作品評を書いて、成果を高く評価した。

趙樹里は70年に至って、太原で激しい批判にさらされ、虐殺同然に命を落とした。その四年前に、老舎は北京で同じく悲劇的な

死を遂げていた。胡絜青にとって、趙樹里の死は当然ながら老舎の死に重なる。趙樹里への記念は、老舎への記念であり、自らの悲しみと怒りを、あらためて心に刻むことなのであろう。

次いで「悼亡友于立群」に移ろう。于立群〔1916-79〕とは郭沫若の夫人である。郭沫若が日本から帰国して、抗日陣営の要人となって以来の伴侶であり、郭沫若病死の翌年の1979年2月、自ら命を絶った。これは于立群を悼む一篇であり、わたしは同年の『収穫』第5期誌上で読んだ。ひとしおの感慨を覚えたことを憶えている。

胡絜青と于立群との出会いは、抗戦期の重慶にさかのぼる。(初対面は1943年のはずであるが、胡絜青は1942年と書いている〔340ページ〕。夫人が3児を連れて北平から重慶に来たのは、1943年秋であるが、わたしがそう書いた文章について、43年ではなくて42年であると指摘されたことがある。誤った記憶であるから訂正するわけにはゆかないが、夫人には42年であるとする確信があるのであろう。根拠は知らない)。建国後も北京で夫婦ごとの親交が続く。于立群もまた文革によって深い傷を負う。二人の男児を失ったばかりか、実家の姉妹も世を去った。夫郭沫若は毛沢東の庇護によって、辛うじて攻撃を免れていたが、常に批判が準備されていた。孔子批判の際には、病を抱えた郭沫若にもとに「四人組」(誰であるかは知らない)が乗り込んで、郭が尊孔派であると激しく非難し、郭沫若は病状が一気に悪化した。そういう事態を前にして、子を守れず夫を守れず、ただ打撃に耐えるしかない。文革の犠牲者の、おびただしい数の母や妻が耐えたように。そして胡絜青もまた、同じ悲劇を通り抜けてきたのであり、文革の嵐が過ぎて後、二人はしっかり手を握って、互いの傷を思いあうのである。

郭沫若の死後、胡絜青は自宅の庭に実った柿を持って、于立群を訪れる。于は元気に語り、笑い、死の翳など微塵もない。郭の遺品整理に忙しく取り組むものと思っていたら、案に相違の死の知らせが届く。あの日の元気な表情の奥にあるものに気づけなかったことを、胡絜青は悔やんでも悔やみきれない。「我想错了」「想错了，想错了」と綴る文字は、何とも痛ましい。

于立群は書家としても知られているが、自分の役割は脇役であると心に決めていたという。中央の要人たる郭沫若のもとには、さまざまな分野の、とりわけ文芸界の、来客が絶えない。主婦として来客をもてなし、時に談話に加わり、郭沫若という大きな存在の任務達成を支えること、それがおのれに課す役割なのだった。そして、それもまた老舎の妻であり画家である胡絜青に共通する役割であって、夫人が「配角」を重視するのも、その役割に強い共感があるからであろう。

「巨人的风格」は周恩来を、「难得的好人」は鄧頴超を語る。周についての一文は舒乙氏の執筆であるが、胡絜青の談話に基づくはずである。

1976年1月、周恩来が亡くなった時、北京にいた人の話によると、あの時は誰もが泣いていたという。自転車をこぎながら、馬車を御しながら、道を歩きながら、みんなが泣いていた。ただ涙を流すのではない、おいおい声を上げて泣くのである。霊前でひと泣きしてあとはけろりとする哭泣の礼ではない。寒空に誰はばからず泣き続けるのである。波乱が予感される四人組末期、不安に包まれる人々は周恩来を信じ、期待を寄せていたのに、その期待の柱が折れたのだ。その悲しみの大きさが、清明節における天安門広場での追悼運動となり、四人組の終焉を予告することになる。

周恩来と老舎との関係は、抗日戦初期の武漢に始まる。政治上の国共合作が実現して、周恩来は共産党を代表して蔣介石政権の

膝元に駐在し、党員や左翼の人々を指導した。老舎は文芸界の統一戦線組織たる文協にあって、無党派の立場から身を粉にし、左翼の作家からも深い信頼を得ていた。老舎の無党派の心情は、共産党がわもよく理解しており、老舎に入党を働きかけることはなかった。建国後の北京で、周は国政の中枢にあり、文芸界をも高い位置から指導する立場にあったが、胡絜青の回想によれば、周恩来は指導者の身ぶりをいささかも見せず、老舎との関係は親しい友人のように見えたという。だが党外の人物たる老舎を周はよく理解し、老舎が中国にとって必要な人物、とりわけ対外的に重要な存在であると認識していたように、わたしは感じている。周恩来は客を食事に招いた際、老舎夫妻を相客に招くことがあった。社交の場に招くこともあった。そういう場で老舎は、いかにも重宝な人物であったにちがいない。

老舎の創作活動を、周恩来は後押しもしたし、課題も出した。作品への修正意見も出した。意見は他人に言わせず自分で伝え、しかも修正の指示ではなくて、相談する風であったという。胡絜青は画家である。北京画院の創設や、困窮する国画家への支援策などは、胡絜青の話を聞いたあとの周の措置ではないかと、胡絜青は考える。

周夫妻は超多忙の身である。頻繁に会えるわけではない。が、あるとき周恩来が老舎家にやってきて、胡絜青を別室に追いやり、老舎と二人だけで数時間に及ぶ密談をする。密談を終えた周は、ここで晩飯を食うと言い、驚いた胡絜青は、有り合わせの材料で粗末な食事を提供した。すると周は喜んで、「うちの小超とおんなじだ。インテリは料理がへたなんだ」と言った。老舎がどう反応したかは書かれていない。(このくだりを読んで、わたしは山本周五郎『長い坂』の一節を思い出した。殿様がいきなり家臣の屋敷にのりこんで、妻に手料理を食わせろと注文した一節を)。密談の内容を、老舎はずっと語らなかったが、老舎の入党問題ではなかったかと、胡絜青は推測する。

老舎が入党を希望したのに対し、周恩来が、老舎は党外にいてこそ本領を発揮できると言って押しとどめたらしいのである。それは抗戦期以来変わらぬ老舎観であるだろう。党外にいるからこそ、周恩来が密かに庇護の手を打つこともできるし、さらには、国際的に孤立する中国にあって、老舎が党外の人物であることが、対外的にも重要な意味を持つはずである。傅光明・鄭実夫妻の調査によれば、１９６０年には共産党北京市委員会文化部の手で、老舎批判が準備されていたが、上からの横やりがあったらしく、批判対象から外されたという〔傅光明、郑实による聞書き「周述曾：１９６０年市委文化部曾经要批判老舎」〕。60年といえば、あの密談より後のことである。市委員会に対して、周恩来の意向が働いたに違いない。

66年8月に老舎は死ぬ。老舎を救えなかったことを、周恩来は終生の悔いとしていたという。老舎の名誉回復がないかぎり、遺族への支援も交際も許されないのであるが、周恩来はそれと分からぬ形で、さまざまに心配りをしてくれていたそうだ。周の死後は鄧穎超がその役割を引き継いでいた。

周恩来は建国の日から逝去の日まで、一貫して国務院総理であり続けた。文芸界の人々とも、さまざまに交流を保ち、あるいは絆で結ばれていた。ここで胡絜青が語るのは、周夫妻との交流というより、周夫妻による温かい庇護の記憶といってよかろうが、こういう周夫妻の心遣いは、ほかの多くの人々にも向けられていたはずである。そして多くの人が、同じような記念の文を書いているのかもしれない。(例えば趙清閣が『浮生若梦』に収めた「亲人邓大姐」「暖风篇」「高风亮节天地鉴」なども、夫妻の姿をよく語っているだろう)。

抗日戦開始の時、老舎一家は済南にいた。胡絜青夫人は老舎を

抗戦の地へ送り出し、翌年、五歳、三歳、一歳の三児を連れて北平に帰り、師範大学付属中学の教員をつとめる。日本占領下の苦汁をなめ、老舎の母の死後の始末をつけたあと、43年秋に十歳、八歳、六歳の三児を連れて北平を離れ、五十日を費やして重慶にたどりつく。この苦難の旅の記録が「丛北平到重庆」であり、これは『時与潮文藝』第5巻第1期〔1945年3月15日刊〕に掲載された。当時の社会の様々な表情を活写する貴重な記録であるとともに、胡絜青という強靭な人格を浮彫りにする優れた旅行記であると思う。この一篇についても紹介したかったのであるが、ずらずら書いて長くなりすぎた。打ち切ることにしよう。

2019・5・13

編集部付記

本文は杉本達夫会員が「老舎研究会報」第33号に発表された原稿を、編集部が特にお願いして転載をお許し願ったものである。老舎と郭沫若は1938年3月中華全国文芸界抗敵協会が漢口で成立した時、その成立大会で知り合ったという。これ以後、二人は抗戦期間を通じて交友を深め、建国後の北京でその交流は家族ぐるみになった。郭沫若夫人・于立群と老舎夫人・胡絜青のつきあいはとりわけ親密なものだったようで、杉本先生の紹介からも、その一端を垣間見ることができる。

日本の郭沫若研究で、于立群に言及したものは余りみない。もとの計画では、この機会に、杉本先生が触れておられる胡絜青の「亡友于立群」（『収穫』第5期、1979年刊）本文の翻訳とともに掲載するはずで、先生から『収穫』所収の文章のコピーまでお送りいただいていたが、編輯計画の杜撰で翻訳が間に合わず、『京腔北韻』の紹介だけになった。掲載を許された著者にお詫びするとともに、転載を快く承諾いただいた老舎研究会の会報編集者・倉橋幸彦先生にお礼を申し上げる。（二〇一九年十二月『郭沫若研究会報』編集部）

『沫若自伝』を読む(五)

苹果ニシテ花紅ノ味ガスル「リンゴ」

―極めて私的な『自伝』の楽しみ方

上野恵司

『沫若自伝』第一巻『少年時代』の最終章は「初出夔門」（初めて夔門を出る）と題されている。「夔門」はキモンと読み長江の航行の難所「三峡」の一番目「瞿塘峡」の異称。いわば四川省から東の湖北省への出口である。

一九一三年の六月、ちょうど辛亥革命後の反動的策動に対する「第二革命」の気運が高まりつつあった頃、天津の陸軍軍医学校が各省で生徒を募集した。四川には六名の割当てがあり、郭はそのうちの一人であった。

七月中旬に発表があり、八月十日までに重慶に集まれということで、七月下旬に嘉定から船を雇って重慶に向かった。時に郭沫若数え年二十二歳。

第二革命の戦乱の最中とて、重慶で足止めをくったり成都に引き返したりした末、省内の戦乱が収まり二度目に成都を出発した時はもう九月中旬であった。

以後の舟航は順調に進み、漢口で下船、京漢鉄道で北上、保定で乗り換えて目的地の天津まで。

しかし、もともと医学を学ぼうという意思のなかった郭は、試験を受ける前からもう天津を離れようという気になっていた。

我自己本来没有学医的意志，我不曾想过要借医业来医人，也不、曾想过要借医业来糊口。那样踏实的想头，在当时的我，是太不浪漫了。我自己住在夔门以内时只因为对于现状不满，

天天在想着离开四川。在那时最理想的目标是游学欧美，其次是日本，又其次才是京、津、上海。〔1-316〕

（私自身はもともと医学を学ぼうという意志はなかった。私はこれまで医術を用いて人を治そうと考えたことはなかったし、医術を用いて暮らしを立てようと考えたこともなかった。そういう堅実な考えは、当時の私には、あまりにもロマンチックなさすぎた。夔門の内にいた頃、ただ現状に対する不満から、私は毎日四川を離れることばかり考えていた。当時、最も理想としていたのは欧米に留学することであり、次いで日本、さらにその次が北京、天津、上海であった。）

試験が始まる前に学校の様子をいろいろ調べてみたが、どうもパッとしない。いざ試験となって、国文の珍問に驚かされる。

科学方面的题目已经忘了，但最最奇特，使我终身也不能忘的，是一道国文题，叫做

——〝拓都与么匿〟。

这五个字实在令我摩不着头脑。〔1-318〕

（科学の方の問題はもう忘れてしまったが、まったくもってみょうちきりんで、一生かかっても忘れようのないのは、

——「拓都と么匿」

という、国文の問題であった。）

手も足も出なかったが、これがスペンサーの total and unit の厳復の訳語であることを知って、あきれはてる。それやこれやで、結局は軍医学校への進学を放棄し、長兄を頼って北京に出る。

北京に出たものの身の振り方が決まらず悶々としているところへ、たまたま訪ねてきた兄の友人の張次瑜の助言を受けて官費留学を目指して日本渡航を決意する。

ダラダラと日本留学までの経緯を記してきたが、この先が今回の主題（なんてものがあるとすればの話だが）である。

日本へはちょうど旅行する予定のあった次瑜に同行することになった。経路は京奉（北京—奉天）鉄道、安奉（安東—奉天）鉄道を経由して朝鮮半島を南下することに決まっていた。

「初出夔門」の五は「楽園外的苹果」（楽園の外のリンゴ）と題されていて、安東で乗り換えた日本列車内の「事件」について述べる。この一篇は独立した短篇小説として読んでも十分に鑑賞に堪えうる名篇である。

ただし、今回はその名篇を鑑賞しようというのではない。

奉天をたって、丸一日かかって安東に着いた。安東で乗り換えると、車内は正月を迎えに帰国する日本人でにぎわっている。中に二十歳前後の若い夫人を連れた三十前後の日本人がいて、「私」にはわからない日本語で近くの日本人に話しかけている。次瑜が言うには、いやらしい支那人が乗っているからと女房の世話を頼んでいるらしい。男は送りに来ただけで、帰国するのは夫人の方だった。その夫人はと言えば、

一个瓜子脸，睫毛很长，眼仁很黑，只嫌粉塗得太厚了。穿着和同车的家庭妇人们也大有不同，大约是当时日本的摩登姑娘罢。〔1-342〕

（瓜実顔で、まつ毛は長く、瞳はまっ黒だった。ただ化粧が濃すぎるようであった。着ているものは同じ車内の家庭婦人たちとは大いに違っていた。たぶん当時の日本のモダンガールだったのだろう。）

「私」は自分の座席近くのこの女の存在が気になる。女の方も

私の存在を認めているらしく、時々視線を向けてくる。このあたり「三四郎」と京都から乗り合わせた「九州色」の女の出会いとの描写を思わせて興味深い。

その「興味深い」ところは置くとして、あいにく日本の金を持ち合わせていない私は食事の時間が来ても食堂車に行くことができない。何度か食堂車行きをパスして空腹を抱えている私に気づいた女は、自分が食堂車から持ち帰ったリンゴを微笑を浮かべながら手渡してくれる。

苹果，红得放着光辉，香得激涌着我的涎泉。我趁着没有人，便把这自亚当以来所被人爱好着的爱的赠品送到最前线上，和我身内猖獗了一天有半的饥饿作战。啊，奇怪！苹果是那样的清甜而脆爽！〔1-345〕

（リンゴは真っ赤でつやつやと輝き、その香りは私の唾液を激しく湧き出させた。誰もいないのを幸いに、私はこのアダム以来人びとから愛され続けてきた愛の贈り物を最前線に送り出し，私の体内に一日半にわたって猖獗していた飢餓と戦わせた。おやまた、これは！リンゴがこんなにすっきりと甘く、さくさくとした舌ざわりをしていようとは。）

この「私」の驚きがわたくしには驚きなのである。なぜ「私」は驚いたのか。

本来我们四川也是有苹果的，但只可供看，不可供吃，吃时就和嚼木屑一样，毫无风味。有一种可吃的，而且是孩子们所爱吃的，叫林檎，又叫〝花红〟，但那比普通的苹果要小七八成。苹果而有花红之味的，我自有生以来才尝到第一次。真真是名实相符的〝智慧之果〟了。〔1-345〕

（もともとわが四川にもリンゴはあるにはあったが、それはただ観賞用になるだけで、食べることはできず、口に入れても木の屑をかむようでなんの風味もない。一種類だけ食べられるものがあって子供たちに喜ばれている。「林檎」とか「花紅」とか呼ばれて、普通のリンゴ「苹果」の七、八割の大きさである。「苹果」であってしかも「花紅」の味があるものに私は生まれて以来初めて出会った。これこそまさしくその名に恥じぬ「知恵の実」であった。）

以前、こんなことを書いたことがある。

りんごのことを中国語で〝苹果〟ということは、中国語を習った人なら誰でも知っている。日本語では「林檎」という難しい字を用いる。もちろん中国語から来ている。〝林檎〟という中国語はあるにはあるが、あまり見かけることはない。在来種のりんごで、今では食べることが少なくなったからだろうか。（『ことばの散歩道』白帝社、二〇一〇年一月）

あまり自信のない文章であったが、「林檎」が在来種で食用に供されることは少なかったことなど、見当違いでなかったことがわかる。今日のものより二、三割がた小さかったことは初めて知った。

余談になるが、郭沫若は在来の「林檎」や「花紅」より二、三割がた大きいリンゴのことを「苹果」と記している。この「苹果」をわが『広辞苑』は一九五五年の第一版以来、最新の第七版に至るまでずっと「へいか（苹果）」の見出しを立て、「林檎りんごの果実。ひょうか」としている。用例は挙がっていない。「へいか」なり「ひょうか」なりが日本語としてどのように使用されていたのか、わたくしは寡聞にして知らない。憶測に過ぎないが、書面での使用例はあったとしても、口頭で使われたことはなかったの

ではないだろうか。

「苹果」はまた「蘋果」とも書く。中国語の発音は「苹」は奥鼻音 ping 、「蘋」は前鼻音 pin 。ただし、広い中国では多くの地方で前鼻音と奥鼻音の区別はあいまいであるから、「苹」と「蘋」は相通じる。日本語では前者に従えばヘイカとなり、後者に従えばヒンカとなりそうだが、事実は「苹」も「蘋」も単に表記の違いに過ぎないとすれば、『大言海』のように、「へいか」に「苹果」「平果」の表記を当て、「欧米ヨリ渡来セルモノノ果実ハ、形、扁平ナル故ニ、苹、又ハ、平ノ字ヲ用ヰル」とするのは、こじつけの感を免れない。

という次第で、厳密を期するならば、リンゴは漢字表記にひとまず「林檎」を当てたうえで、これは本来は在来の小ぶりのものを指すと断り、外来種の大ぶりのものはピングオ（苹果・蘋果）、とでもするのが妥当であると言えそうである。

「十分に鑑賞に堪えうる名篇である」などと記しながら、その名篇たるゆえんに触れることなく粗末な「リンゴ談義」に終わってしまった。ただわたくしの言いたかったのは『沫若自伝』には著者の伝記的事実を離れたところにも、読み応えのある（少なくともわたくしにとっては）興味深い記述が随所に散りばめられているということである。

おしまいにせめての「口直し」に「初出夔門」の結びの一節を引いておこう。

到了釜山，天已经黑了。瓜子脸先下了车，在擦身过时她那两朵紫苑花分外明媚地看了我一下。我看取了那儿的无言的寒暄，是说：〝我们在船上再见。〟然而，惆怅！她哪里知道我们是要在釜山逗留一时的呢？〔1-346〕

（釜山に着いた時は、すでに日が暮れていた。瓜実顔は先に降りたが、私と擦れ違って通る時、彼女の二つの紫苑の花がことのほか輝かしく私を見た。私はその中に無言のあいさつを見て取った。「わたしたちは船でまた会いましょうね」。しかし、悲しいかな！われわれは釜山に一時滞在しなければならないということを、彼女は知るよしもなかった。）

その晩はちょうど新暦の除夜で、「私」と次瑜とは知り合いの所に泊って年越しをする予定であったのである。

苹果的滋味虽然还是很鲜，但〝乐园〟是已经失掉了。〔1-346〕

（リンゴの味はまだ鮮やかに残っていたが、「楽園」はすでに失われていたのだ。）

※引用は《沫若自传》全四巻（人民文学出版社、一九七三年三月）により、巻数と頁数を示す。

■□

本号執筆者紹介（掲載順）

岩佐　昌暲（いわさ　まさあき）九州大学名誉教授
杉本　達夫（すぎもと　たつお）早稲田大学名誉教授
上野　惠司（うえの　けいじ）日本中国語検定協会理事長、共立女子大学名誉教授
成家　徹郎（なりけ　てつろう）大東文化大学人文科学研究所

成仿吾の欧州行（四）

成仿吾が日本に来た時期

成家徹郎

成仿吾は、一九二八年のおそらく四月あたりに周恩来の指示（要請）を受けて、欧州へ行くことを決断した。他の人はこのことを誰も知らない。したがって、周囲には、突然上海から離れたように見えた。成仿吾は欧州へ行く前に、まず日本に来て郭沫若に会った。というよりも郭沫若に会うために日本に立ち寄った。彼は、突然欧州に行くことになった事情を郭沫若に話したと思われるが、彼はこのことについて何も書いていない。

この時期の成仿吾は、創造社の活動そして魯迅との論争に熱中していた。それなのになぜ、突然これらをすべて捨てて欧州へ行くことになったのか。成仿吾にとって人生の大転換であったはずだし、創造社にとっても大問題だったはずだ。いったい何があったのか、訳を知りたいと私は思うのだが、これまでなぜか疑問を感じた人は誰もいないらしい。成仿吾は、後年になってもこの点では、口を閉じている。またこの点について言及した著述は、管見のかぎりでは一つもない。まるで誰も何の疑問も感じていないように見える。

私は、周恩来の強い要請を受けて欧州へ行く決断をしたと考える。この点に関して直接的証拠は何もないので、当時の状況をしらべることによって推測する。まず、日本に来た時期に関する資料を列記し、そのあと論評を加える。

① 宋彬玉、張傲卉「成仿吾年譜簡編」一九八四年

（一九二八年）五月一日、「畢竟是〝醉眼陶然〟罷了」発表。同月、「文学革命の展望」発表。

同月、マルクス主義理論を系統的に学習するために、成仿吾は上海を離れて欧州へ行くことになった。成氏は出国の前に、創造社に対して周密な手配処置を行った：江南書店を設立し、創造社が封鎖されたあとでも活動が中断しないように備えた。（創造社が封鎖されたら、書籍の紙型を江南書店に運んで、出版を継続する。）またそれを掩護するため、出版部販売店の二階に「上海珈琲店」を開設した。これらは、成仿吾が立案し処置しただけでなく、資金も提供した。すべて準備がととのったのち、出国した。（鄭伯奇「創造社後期の革命文学活動」による。）

成仿吾が欧州へ行くときは、日本の敦賀からウラジオストクへ行き、ソ連国内の路線を経て行った。途中、日本でひと月あまり滞在した。駐日大使館で仮名を用いて、モスクワを経てフランスへ行くための旅券を申請した。滞在時期に、市川にある郭沫若の寓居に数日宿泊した。創造社の活動について話し合ったときのことを、のちに郭沫若はこう書いている〝成仿吾の矯正が少し行きすぎたと感じ始めており、彼は彼の出発前に、作家連盟を組織して、分裂の局面をもう一度結合させ、到来するかも知れぬ外界の圧力をふせぐことを提案した。〟（「郭沫若自伝・海涛集」一九四七年　による）

成仿吾はかつて東京の左翼作家数人を訪問したことがあった。それで日本の友人も市川に訪ねてきた。その中に戦旗社の作家二人、藤枝丈夫と山田清三郎がいる。彼らは中国文芸運動の情況について詳しく質問した。このときの会見の記録は日本の雑誌『戦旗』に掲載された。成仿吾が欧州へ行く話に及んだとき〝中国無産階級の選出した文化代表〟と紹介した。

（『成仿吾研究資料』）

② 張資平「読〈創造社〉」（王独清著「創造社」を読んで）
一九三二年

成仿吾は、（一九二八年）五月はじめのある日に日本へ行くことに決めた。ある日、王独清がふいに我が家を訪ねてきて言った・・・。

（『創造社資料』下　福建人民出版社、
『成仿吾研究資料』収録）

③ 郭沫若「海涛集」一九四七年

まもなく成仿吾も国内からやってきた。彼は市川の寓居に数日泊まった。彼の話によると、あの「三一五」事件ののち、国内にはこういうデマがとんだ、私が日本政府によって強制送還され、すでに死刑になった、というのである。【中略】成仿吾が来たことで、私は創造社の工作の様子を詳細に知ることができた・・・

彼は彼の出発前に、作家連盟を組織して、分裂の局面をもう一度結合させ、到来するかも知れぬ外界の圧力をふせぐことを提案した、といった。彼のこの提案には、私は大賛成だった。ただ私は海外にいる身だし、仿吾も遠く欧州へ行かねばならない、私たちはこの提案を推進する上ではともに無力だった・・・

仿吾が来たことによって、彼はかつて東京の一部の左翼作家を訪ねたことがあるので、左翼の友人のほうでも市川に訪ねて来るものがあり、私もいっしょに訪問されることになった。私の住んでいる所は粗末で、談話に供するようなところはないので、いつも横田家の洋風の客間を借りて客と会った。一度戦旗社の二人の作家が来訪したことがあった。一人は藤枝丈夫で、もう一人彼よりも地位が高い人がいたが、私は今ではどうしてもその姓名が思い出せない。彼らは詳細に国内の文芸運動の状況を質問し、仿吾もありのままに報告した。仿吾は極度に朴訥な人で、彼の話は日ごろ過度に倹約されている。十分いうべきところを彼は一分しか言おうとせず、十言いうべきところを彼はしかたなくひと言しゃべる。彼はまるで宣伝のできない人で、まして自己宣伝など口にしたくもできない。しかし左翼の運動に従事する人には、初期にはどうしても大げさにものをいう欠点のある人がいるもので、それは、普遍的な国境を越えた傾向であるようだ。その会見は、記録されて、『戦旗』誌上に発表された。それは藤枝丈夫の筆だった。彼は欧州に行くことにふれて、『中国無産階級の選出した文化代表』といい、また一人の文化巨頭のK（彼が私の姓名を書かなかったことに感謝する）が、「魯迅は中国文壇で清算されている」と公言したことにふれていた。私はこれは問題が起こるぞと思った。果たして魯迅先生のある雑文に、まもなく反応が現われ、彼は憤慨して仿吾を皮肉り、あわせて私も皮肉っていた。魯迅先生としては腹を立てるのは必然のことであったが、内情をはっきりさせてみれば、仿吾と私として責任を負えないのも、また理の当然であった。

仿吾が欧州に赴くにも、例の敦賀からウラジオストックへのコースを通った。彼には私もいっしょに行かせたいという気が大いにあり、私としてもその気は大いにあったが・・・

（一九二八年八月一日、成仿吾が欧州に向かって発ったあとのこと。郭沫若は警察に逮捕されて東京日本橋の留置場に入れられた。：成家）

彼（取調官）はまた成仿吾のことをきいた。私は仿吾がくれた手紙が、彼らの捜索で持って行かれたのだと推測した。それは非常に長い手紙で、おそらく三、四千字あったろう。仿吾は敦賀港からウラジオストックに渡り途中の見聞を、ベルリンから非常に詳細に私に書いてよこした。当時ソ連の革命は成功してからわずか十年で、旧ロシア時代のよくない風俗習慣が、まだ多分に残っており、仿吾はそれにも遠慮なく批判を加えていた。この手紙が

彼らの手に落ちたのは、残念なことだったが、しかし私の現状にとっては、非常に有利だった。日本人が喜ぶのは今の米国人と同じで、ソ連を批判しさえすれば、それで危険が減少するらしかった。私はそこで成仿吾のくわしい様子も話してやった。

一時間ばかり尋問すると、彼らは西洋料理を一人前とって食べさせてくれた。私は腹が実際へっていたので、存分に食べた。私が食べ終わって、金を払おうとすると、彼らはこれは彼ら持ちだという。私はまったく意外に思った。しかし私はたしかに嬉しくもなった、今日はともかく自由になれる。

75頁

（取り調べに当たった人の中に〝朝鮮人に似た男〟がいた。

：成家）

例の朝鮮人に似た男は、中国語が少しわかって、外事課では「支那通」ということになっており、命を受けて私の行方を調査して、たっぷり半年苦労したのだった。警視庁では私が日本に来たことはわかっていたが、どこに住んでいるかわからなかった。・・・

支那通は仿吾がくれた例の長い手紙のことも話題にした。あの手紙は果たして彼らに検閲された。彼はその長い手紙を翻訳するため、二晩眠らない始末だった。私はこの時になってまた一つわかった。つまりこの男の中国語の程度があまりにも貧弱だったことが、私を留置場に一昼夜よけいに置いたのである。

支那通は彼の手提鞄の中から手紙をとり出した。赤や青で紙いっぱいに印がついていたが、それでもまだ彼にわからないところがたくさんあった。彼が説明してくれというので、私は説明してやった。日本人は中国の文語文についてはわりに容易に理解する、彼らは一千年の経験を積んでいて、われわれの文語文を読破する彼ら一流の方法を持っているからである。しかし彼らは口語文となると手を焼き、ごくありふれた言葉でも、ちんぷんかんぷんになってしまう。あの手紙は、と支那通がいった、残しておいて参考にしたいので、贈ってほしい。これは明らかに強盗の仁義だったが、私は気前よく承知してやった。私は思うのだが、もし東京の警視庁が爆撃されていなかったら、あの手紙は今日でも、まだ彼らの書類の中に保存されているかも知れない。

〈〈郭沫若自伝5〉平凡社東洋文庫〉

④ 山田清三郎「支那の二作家を訪ねて」一九二八年

支那のプロレタリア文学運動は、どういう風にして起り、現在は、どうした状態にあるか。そしてその将来の発展にたいする予測はどうであるか。これらは、我々の常に知ろうとして、未だに知り得ないところであった。

一日、私達は、折柄来朝中であった、尊敬すべき二人の支那のプロレタリア作家を訪ねて、親しく両君の口から、このことについて、その概要を知ることができたのはこの上もない幸であった。

二人の作家とは誰であるか、一人は、劇の研究のために独逸に赴く途次、我国に立寄り、四月の左翼劇場第一回公演をも観てくれた。上海創造社の中堅成仿吾君で、今一人の青年は、昨年の五卅事件の際、蔣介石から自分の首級に、何万円かの懸賞を付せられたことのある、実際運動の方面でも、幾度となく身を以て砲火の間をかけめぐって来た有数の闘士で、同時に、支那プロレタリア文学運動の先駆者の一人である。

この文章が、活字になって雑誌に出る頃には、成君は長い西比利亜鉄道のレールの上を、支那の労働者農民から選ばれた彼等の芸術家として、母国の風雲を頭に描きながら独逸への旅を急いでいることであろう。そして電光のように姿を見せた、今一人の青年作家も、恐らくは成君と共に、もはや我国にはいないことであろう。私は心から両君の健康を祈って、再会の日を期したいと思う。

（『戦旗』一九二八年七月号）

⑤ 藤枝丈夫「中国の新興文芸運動に就て」一九二八年

『え？　中国プロレタリア文芸運動の現勢ですか？・・・　さあ、大分、話が硬くなってきましたね　―　』

こう言ってK君は灰皿を凝視した。去年、広東事件の折に患った猛烈な腸チブスの為に、すっかり毛の薄くなった頭を、いくらか前に屈めて、雨催いの空を背にしたその顔には、逆光線が濃い陰影を作った　―　私は静に万年筆を執あげる　―　キラリと度の強い近視鏡が真正面に私の方を向いた。

『文芸運動に入る前に、やはり一通りの社会的情勢を喋らないと、どうも判りにくいでしょう。―　一九二七年の二月までは、ブハーリンが分析したように、中国革命の形態は、多分に民族運動の性質を帯びた混合型でした。それが同年の四五月頃に、とも角、それまでは帝国主義への闘争に合流して来たブルジョアジィが、完全に反革命の陣営に移ってしまい、続いて、五月から七月一杯にかけて、武漢派の急進ブルジョアジィ・小ブルジョアジィの一群が清算されて、八月一日から、八月一日事件から、始めて純粋のプロレタリア××に進展したのです。勿論、八一事件は軍事的には失敗しました。だが、プロレタリアートの歴史的使命への突進は、その日から足音高く轟き渡っているのです・・・　』

K君の白い透明な顔は一抹の紅味を帯びた。セルのキモノに包まれた長躯を、若き中国の熱血が駆けめぐるのであろう。

【中略】

『今、仕事をしているのは、主にどんな人たちです？　』

『上海を中心に、創造社と太陽社の人々だけですね。創造社の手で創造月刊、文化批判（理論雑誌）、流沙（啓蒙的）、太陽社からは太陽月刊、外に我們月刊というのが別に出て居ます。文化批判は四号出して発行禁止されたので六月から思想というのが出る筈です。創造社も以前は極左的な理論に指導されていたのですが、最近は外部の政治的意見に従ってかなり包含力ある運動に転換して来ました。・・・　一般にCPの文芸政策がかなり濃厚に、敏速にどの雑誌にも反映します。その点は日本より巧く行っているようです。・・・　今主としてなされているのは旧来文学への決算ですね。魯迅、張資平等の人々が厳正に批判されています。・・・　日本には余りこんなことは判っていないのですね、一つ大いに紹介して下さい。日本の作品もどれを紹介したらいいか知らして下さい。―　お互いに大いにやりましょう！　』

私たちはそれから間もなくさよならを言い合った。恐らく最後のさよならを・・・　K君は今頃、文芸評論家としてよりも、鉄の様な戦士として吼える支那の黄色い街を馳駆しているだろう！

（『戦旗』一九二八年七月号）

◇　筆者の論評

資料①「成仿吾年譜簡編」はその著述時期一九八四年の認識にもとづいているから、こういう記述になる。その当時（一九二八年四月五月）、周囲の誰も、成氏が欧州へ行くことを知らない。〝成氏は出国の前に、創造社に対して周密な手配処置を行った〟のは事実だが、次の資料によれば、周囲には〝日本へ行く〟と言っていたようだ。日本へ行くのであれば、どうせすぐもどってくる、と周囲の人はみな思ったはずだ。

資料②は一九三二年の記述だから、おそらく当時の認識そのままであろう。成氏は周囲には「日本へ行く」、と言って上海を離れた。

資料④は成仿吾の欧州行について、最もはやくに出版された文字記録である。

いま見る資料の中では、成仿吾が欧州へ行くことを世に明らかにした、当時の著述はこれだけである。上海にいた創造社同人たちも『戦旗』の記事を見てはじめて、成仿吾が欧州へ行ったこと

を知った。成氏は、急に欧州へ行くことになった事情を郭沫若には語ったと思われる。というよりも、突如上海および創造社から離れることになった訳、つまり周恩来から強く要請された事情などを郭沫若に話したかったから、日本に立寄った、と私は推測する。

成氏が日本に来た時期についてだが、資料④の記事によれば、四月には来ていたことになる。他の資料はたいてい五月に日本に来た、となっている。どちらが正しいか判断できない。ただ次号で紹介する『周恩来伝』に見える周恩来の行動を見ると、四月中旬に両氏が会った可能性があるので、四月に来日した可能性はじゅうぶんある。

次号では、成仿吾がなぜ急遽欧州へ行くことになったかおよび、周恩来が欧州で活動してもらう人物としてなぜ成仿吾に着目したか、について考察する。「成仿吾と金」の問題は当時からいろいろ言われていた。

創造社の同人たちが、突然出てきた「成仿吾の欧州行」について、当時まったく何も書いていないのは私にはとても不思議に思われる。創造社にとって大問題だったはずなのに。

文　献

鄭伯奇「創造社後期の革命文学活動」一九六二年8月。『成仿吾研究資料』収録
饒鴻競等編『創造社資料』上下　福建人民出版社一九八五
宋彬玉、張傲卉「成仿吾年譜簡編」『成仿吾研究資料』
張資平「読〈創造社〉」『創造社資料』収録
郭沫若「海涛集」一九四七年（小野忍、丸山昇　訳）。
平凡社東洋文庫〈郭沫若自伝5〉一九七一
史若平編『成仿吾研究資料』（中国文学史資料全編）
湖南文芸出版社一九八八
山田清三郎「支那の二作家を訪ねて」
藤枝丈夫「中国の新興文芸運動に就て」
全日本無産者芸術連盟機関誌『戦旗』（月刊）
一九二八年七月号　戦旗社

左から、王独清・郭沫若・郁達夫・成仿吾。
広州における創造社同人（1926年5月）
『創造月刊』第一巻第四期1926年7月

湖南省娄底市博物館
この１階に成仿吾記念室がある。
（斎藤孝治氏提供））

編集後記

■今年は21号の発行が遅れたのに続いて、今号も発行が遅れました。表紙には二〇一九年十二月二〇日発行と書きましたが、この編集後記を書いている時点で、すでに年内発行は無理と告げられています。お詫びします。同時に、編集作業が能力的に限界に近付きつつあることも正直に申し上げておきたいと思います。新年度には、会のありかたも含めて、今後のことをご相談したいと思います。

■それにしても、原稿が少ない。連載原稿をご寄稿頂いている、成家徹郎、上野恵司両先生には感謝のほかありません。それにしても、もっと原稿が欲しい！よろしくお願い申し上げます。

■今年は、天災地異が相次ぎました。会員の中にも被災された方がいらっしゃるのではないか。心配していたら、長野市にお住まいの上村京子会員から他用でお電話をいただきました。千曲川の水害とは関係なかったとのことで、安心した次第。

■訃報です。大高順雄会員が7月24日、逝去されたとのご連絡をご遺族から頂戴しました。大高先生は郭沫若と同じ旧制第六高等学校卒。東大仏文科出でフランス語学がご専門ですが、旧制六高の縁で、晩年、郭沫若研究に着手され、設立の初期から当会会員として活躍されました。会報にもたびたび寄稿され、入院直前まで郭沫若の旧詩「蜀道奇」の翻訳に取り組まれ、入院直前まで筆者とメールでやり取りしていました。関係の訳書に、藤田梨那、武継平会員との共訳『桜花書簡　中国人留学生が見た大正時代』東京図書出版会、２００５年６月刊。１９３１年生まれ、享年八十八歳。ご冥福をお祈りします。

■新しい年号は『万葉集』にみえる「梅花の歌三十二首」が出典だそうで、大宰府にいた大伴旅人が居宅で開いた宴会で読まれたうたに由来するということですが、学生時代の郭沫若も大宰府の梅の下で田漢と小宴を開き「梅花樹下酔歌」という詩を書いています（本号所載論文参照）。それがどうした、と言われそうですが、いや別に。来年の3月で作詩から丁度百年目になるというので、感慨を催し記録しただけです。

■新しい年、皆さまのご活躍と、ご多幸をお祈りします！

（Yanzuo）

郭沫若研究会報　第22号
発行日　二〇一九年十二月二〇日
発行所　日本郭沫若研究会事務局
〒八一〇-〇〇三一福岡市中央区谷二-二〇-八-三一一
岩佐方
TEL〇九二-七一五-二五五四（FAX兼用）
メールアドレス　japankakuken@gmail.com
ホームページ http://www7b.biglobe.ne.jp/~guomoruo/
印刷　コロニー印刷（社会福祉法人　福岡コロニー）

『郭沫若研究会報』投稿規定

1. 発行
『郭沫若研究会報』は、年2回（原則として6月20日／12月20日）に刊行する。
掲載原稿の締め切りは6月号は5月10日、12月号は11月10日とする。

2. 原稿の執筆資格
執筆資格は会員に限るが、編集部の委嘱、会員の推薦のあった非会員の原稿も掲載する。

3. 原稿の内容
会報発行が本会の中核的活動であることに鑑み、学術論文のみならず、会員の学術活動を含む近況報告、エッセイ等も掲載する。
なお「原稿の種類」の項を参照されたい。

4. 原稿の字数制限等
経費（印刷費および郵送費）の関係で、各号最大B5版四〇頁(表紙含む)までにしたい。論文は四百字原稿用紙換算で、二九枚・一一万一六〇〇字（会報換算7頁）、その他は二〇枚半・八二〇〇字（会誌換算5頁）を上限とする。いずれも、図、写真を含む。

5. 原稿の種類
A. 論文・報告（郭沫若・創造社同人およびその周辺に関する研究、報告）
B. 資料紹介（郭沫若・創造社及びその周辺に関する新しい資料の紹介・解説）
C. エッセイ（郭沫若・創造社同人およびその周辺に関する随想、研究余滴など）
D. 書評・論文評（郭沫若・創造社同人の作品、およびその周辺に関する書物、論文の評論・紹介）
E. 翻訳（郭沫若作品、外国語の郭沫若研究の翻訳紹介・本邦初訳のもの）
F. 会員近況

6. 原稿料は支払わない。執筆者には3冊を贈呈。

＊本号は、編集上の都合で、紙版とホームページ掲載の電子版で体裁が違いますが、掲載の論文、エッセイ等には何の変更もありません